

氷屋の旗

石川啄木

青空文庫

親しい人の顔が、時として、凝乎ぢつと見てゐる間うちに見る見る肖にても肖つかぬ顔——顔を組立ててゐる線と線とが離れくになつた様な、唯不釣合な醜い形に見えて来る事がある。それと同じ様に、自分の周囲の総ての關係が、亦時として何の脈絡も無い、唯浅猿あさましく厭はしい姿に見える。——恚かうした不愉快な感じに襲はれる毎に、私は何の理由もなき怒り——何処へも持つて行き処の無い怒を覚える。

双肌もろはだ脱だいだ儘仰あふむけ向むかひに寝転んでゐると、明放した二階の窓から向ひの氷屋の旗フラフと乾き切つた瓦屋根と真白い綿を積み重ねた様な夏の雲とが見えた。旗フラフは戦そよと風もない炎天の下に死んだ様に低う

頭なだれて襪ひだ一つ揺がぬ。赤い縁だけが、手が触つたら焼けさうに思はれる迄燃えてゐる。

私も、手も足も投出した儘動かかなかつた。あたか恰も其氷屋の旗が、

何かしら為しようくと焦あせ心り乍ら、何もせずにある自分の現在の

精神の姿の様にも思はれた。そして私の怒りは隣室でバタ／＼団

扇を動かす家うちの者の気勢けはひにも絶間なく煽られてゐた。胸に湧出る

汗は肋あばら骨ほねの間を伝つてチヨロリ／＼と背の方へ落ちて行つた。

不ふ図と、優しい虫の音が耳に入つた。それは縁日物の籠に入れら

れて氷屋の店に鳴くのである。——私は昔自分の作つた歌をゆく

りなく旅先で聴く様な気がした。そして、正直のところ、嬉しか

つた。をさななじみ幼馴染ロマンチックの浪漫的——優しい虫の音は続いて聞えた——

それも暫時^{しばし}。夏ももう半ばを過ぎるのだと思ふと、汗に濡れた肌の気味の悪さ。一体何を自分は為る事があるのだらうと思ひ乍ら、私は復死んだ様な氷屋の旗^{フラフ}を見た。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆18 夏」作品社

1984（昭和59）年4月25日第1刷発行

底本の親本：「石川啄木全集 第四卷」筑摩書房

1980（昭和55）年3月

初出：「東京毎日新聞」

1909（明治42）年8月

入力：砂場清隆

校正：菅野朋子

2000年6月3日公開

2005年11月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

氷屋の旗

石川啄木

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>